

緑内障診療における ステレオ眼底カメラの役割

2014年9月20日(土) 17:30～18:30

第5会場(大阪国際会議場 10F 会議室1009)



座長

富田 剛司 先生

(東邦大学医療センター大橋病院 眼科 教授)

近年、光干渉断層計(以下、OCT)がめざましい発展を遂げ、眼底画像解析イコールOCTと認識されるような状況になり、スペクトラルドメインOCTは緑内障の診断にも幅広く活用されるようになってきた。それでは、緑内障の眼底変化を検出するには、OCTで検査すれば、すべて事足りるのであろうか? 緑内障性視神経変化の重要な特徴として、視神経乳頭陥凹の三次元的な拡大とそれに対応する乳頭辺縁部(リム)の狭小化(乳頭辺縁萎縮)および網膜神経線維層欠損が挙げられる。陥凹拡大の初期変化を捉えるには、立体眼底写真による人間の眼での判断が最も精度が高いとされている。ただ、最近ではOCTを多用するあまり(?)、この乳頭陥凹の観察が疎かになっている感も否めない。そこで我々は、乳頭陥凹を立体的に観察することの重要性を再認識していただくためには、これが立体的にどのように見えるかを体験していただくしかないと考えた。一度でもこの画像をみれば、3D映像の虜になることは間違いない。今回のセミナーは、多人数が集まる会場では難しかった3Dでの画像を実体験していただきながら、その有用性と活用法を、2人の緑内障診断エキスパートに解説していただく。3Dシアター興和の会場に是非ご参集ください。



演題 1

立体眼底写真で診断する緑内障性陥凹

金森 章泰 先生

(神戸大学医学部附属病院 眼科 講師)



演題 2

立体眼底写真で判断する緑内障の進行

新田 耕治 先生

(福井県済生会病院 眼科部長)